法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-30

〈書評と紹介〉福元真由美著『都市に誕生した保育の系譜 : アソシエーショニズムと郊外のユートピア』

沢山, 美果子 / SAWAYAMA, Mikako

(出版者 / Publisher)
法政大学大原社会問題研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌
(巻 / Volume)
761
(開始ページ / Start Page)
82
(終了ページ / End Page)
86
(発行年 / Year)
2022-03

書　評　と　紹　介

福元真由美著

『都市に誕生した保育の系譜
——アソシエーショニズムと郊外のユートピア』

評者：沢山　美果子

本書は，学位請求論文「大正期・昭和初期の都市における保育の系譜——アソシエーショニズムと郊外のユートピア」に加筆修正し，表題を「都市に誕生した保育の系譜」と改めたうえ，「まぎれもなく保育分野における画期的偉業であり，歴史研究によって拓かれた教育研究の労作」とする佐藤学氏の「刊行に寄せて——解題」を付して刊行された。その後本書は，日本保育学会第56回（2020年）「保育学文献賞」を受賞し，保育史の側からの書評も多く出される（巻末【書評一覧】参照）など，保育史研究の分野で高い評価を受けている。

評者は，近代家族と子育てや近世の性と生殖，捨て子の問題について歴史的に考えてきた。しかし保育史が専門ではなく，『近代家族と子育て』［沢山2013］で主な対象としたのも1910～20年代の新中間層の子育てである。では，いわば専門外の評者が，1920～30年代の保育の系譜を問う本書を読むとき，そこから何を学ぶことが出来るだろうか。本書評では，保育史と歴史学との対話をめざし，次の二つの視点を設定する。

一つは，保育の現場を歴史の生きた現場としてリアルに捉えるために，本書から垣間みえる親たちの姿や，その子ども観に目を凝らして本書を読み直し，1920～30年代の子育てや子ども観の諸相を明らかにするうえで本書が持つ意味を考えるという視点である。本書からは，どのような子育てをめぐる家族の状況や，親＝大人と子どもの関係，子ども観を読みとることができるだろうか。二つには，本書を，近代家族と子育てや，1920～30年代の都市の子どもの「教育経験」に焦点を当てた歴史研究とつきあわせることで，この時期の子育てと保育の現場に迫るための課題を探るという視点である。

この二つの視点で，本書を読み直すとき，本書が内包する，保育史にとどまらない近代の子育て史研究にとって持つ意味が，より明瞭に見えてくることだろう。

そこでここでは，最初に本書の概要を示し，次いで保育史の視点からの各書評の論点を整理し，そのうえで，上記の二つの視点で読み直した時に見えてくる本書の成果と課題を提示してみたい。

本書の概要

本書の主題は，1920～30年代の都市化がもたらした産業化と郊外化に伴って成立した「アソシエーション」，つまり協同組合型保育所と，「郊外のユートピア」としての郊外住宅地に誕生した郊外型幼稚園の両者を，「都市化により生じた保育の様相を相互補完的に表すもの」と捉え，その「保育実践の歴史的な意味を検討する」（15頁）ことにある。著者は，これら都市化のもとでの新たな保育の場登場の契機が，

「労働者層の母親の協同」と「新中間層の母親の子育ての再編」にあった点に注目する。そのうえで，新たな保育実践の内容をつぶさに明らかにすることを通して「母親が保育を通して，都市生活の子育てをどのように編み直そうとしたのか」（15 頁）を考察する。その意味で本書は保育の現場を対象に，保育の側から子育てに接近しようとした，1920 ～ 30 年代の子育て史研究としても読むことができる。

主題に沿い本書は，「保育とアソシエーションの形成」「郊外住宅地に成立した保育の実践」「保育の成立に見る都市と郊外」の三部から構成される。第Ⅰ部では，大阪，東京の四つの協同組合型保育所（賀川豊彦の光の園保育組合，志賀志那人の北市民館保育組合，東京帝国大学セツルメント託児部，同潤会アパートでの平田のぶの子供の村保育園）の保育を取り上げる。これらの保育所は，産業化による工場の増加と人口増大，生活環境の悪化と社会の相互扶助的人的結合の喪失，震災の被災者の生活再建といった都市問題の諸相と深く関わり，「都市の家庭生活を再編し，子育ての空間を個人的な領域ではなく協同的な領域においていかに構成するかを課題」（111 頁）とした。そこでは，保育を契機とした人々の結びつきや社会との関係を意識した保育が作り出されていく。

第Ⅱ部では，四つの郊外型幼稚園（橋詰良一の家なき幼稚園，小原国芳による成城幼稚園の設立と小林宗作のリトミックによる保育，高崎能樹の阿佐ヶ谷幼稚園，賀川豊彦の松沢幼稚園）を取り上げる。これらは，大阪と東京の鉄道会社を中心とした郊外住宅地開発や，「都市中心部の劣悪な生活環境と被災地の混乱を避けて，自分たちの価値観に適合する生活空間を手に入れたい」という新中間層の欲求（207 頁）を背景に成立した。ここでは，「「郊外」に移り住んできた都市新中間層の家庭」（161 頁）の教育意識と交差する「よい子」や「個性」を求める（228 頁）保育，「郊外」の「自然」が子どもにとって持つ意味に着目した保育に光が当てられる。

第Ⅲ部では，新しい保育の登場と都市化が一体となって生じたことを論証した第Ⅰ部，第Ⅱ部をもとに，協働組合型保育所と郊外型幼稚園という「都市化により誕生した保育の系譜」を第三の系譜と位置づける。その理由は，両者の保育が「保育に(ママ)自然を組織する多様な方法」の開発や「人間関係や身体に関わる実験的な実践」，地域社会形成への「具体的な実践の場」の準備など，新たな「保育の空間を開いていった軌跡」（240 ～ 242 頁）に求められる。第三の系譜の提唱は，幼稚園と保育所の二つの系譜で語られてきた従来の保育史の捉え直しを迫るものである。

保育史からの書評の論点

保育史の視点からの書評［巻末【書評一覧】］では，本書が，1920 ～ 30 年代の保育の諸相を，都市中心部の労働者階級と郊外の新中間層という二つの階層とその教育要求にもとづく「協同組合型保育所」と「郊外型幼稚園」の保育を共時的に考察した点［志村］，精緻で独創的な事例研究［湯川・浅野］により，都市の子育ての再編の特徴を描き出した点［太田］が高く評価されている。他方，「都市化と保育」の諸相をよりリアルに描き出すという視点から，「アソシエーション」「郊外ユートピア」という分析概念の有効性［湯川］や，「都市化」という枠組みの射程［太田］，また，あえて「第三の系譜」とすることへの疑問［湯川・浅野］が提示されている。

これらの書評からも明らかなように，本書の成果は，環境悪化がすすむ都市中心部に暮らす労働者階級と，望ましくない環境を避けて郊外

に移り住む新中間層の二つの階層を対象に，1920~30年代に共時的に存在した協同組合型保育所と郊外型幼稚園の保育の特徴を精緻に考察した点にある。しかし，両者を「第三の系譜」と一括りにし「都市化により生じた保育の様相を相互補完的に表すもの」（15頁）とする時の，「相互補完」性の内実は必ずしも明示的ではない。保育の現場を，保育者，親，子どもが生きた歴史の現場としてリアルに捉えるためには，さらなる模索が求められる。

本書評の論点――保育と子育ての現場への接近

では，どうしたら，1920～30年代の保育の現場をよりリアルに把握することが出来るのか，そして本書を，保育史にとどまらず，さらに広く近代の子育てや子ども観に接近するための手がかりとして受けとめることが出来るのか。ここでは，本書に示された史料のなかから，家族の状況や親と子どもの姿を読み解き，さらに本書を，近代家族の子育てや都市の子どもの「教育経験」に焦点を当てた歴史研究と関わらせることで考えてみたい。

同じく1920～30年代の都市の子どもたちの「教育経験」に光を当てた研究に，大門正克の『民衆の教育経験』［大門2000→2019］がある。大門は「都市の子どもと言っても，新中間層の多く住む地域と下町や工場街とでは，子どもの生活や経験が異なる」［大門：107］とし，新中間層の家族が多く住む地域（東京府中野町，現・中野区）と，新中間層と在来的職人・農業・労働者の三種の職業の人びとがいた地域（東京府滝野川，現・北区），それぞれの小学校の子どもたちと家族を比較している。前者は性別役割分担の教育家族であり「純粋・無垢」な心で個性を発揮した「よい子」に育つことを願う童心主義の支持者である一方で，受験にもとりくむことを願う親たち。後者は，経済的事情から進学できない子どももおり，学校が盛んに家庭教育の重要性を説いても容易に取り入れない家族である。両者のそうした様々な相違についての考察なども踏まえ大門は，「第一次世界大戦後は，さまざまな子ども像が議論された「子どもの時代」にほかならなかった」［大門：281］としている。

本書から見えてくるのもまた，協同組合型保育所と郊外型幼稚園の「相互連関」というよりも，保育目標や子育てを巡って議論された「さまざまな子ども像」のほうであり，「第三の系譜」というよりは「子どもの時代」の諸相である。

光の園保育組合の「設立趣意書」や北市民館保育組合の「協同組合の宣言」では，「私共の家庭では特別に子守さんを雇う余裕も御座いませんし，又忙しくしていますので，自分の家庭だけで，手落ちのないように育てあげることは中々困難」（45頁），「自分の家庭の力だけでは子供を立派に育て上げることは困難」（64頁）な家庭の状況が語られる。また，子供の村保育園の「村人の誓」では，「吾子を含めた凡ての子供の幸福」を「祈願」（216頁）し，「父親からの要求で」父様学校が設立され，「父様母様学校宣言書」では「両親の協力」が謳われる（101頁）。平田がめざした「よい育ち」とは子どもが「個人としては自治，又社会人としては協働の生活が出来る」（106頁）ようになることだった。

それに対し郊外型幼稚園の親たちの状況は，本書に示された史料を見る限り大きく異なる。例えば，家なき幼稚園の保育者たちが記した「所感録」と保育当番の母親による「お当番日記」には，子どもの「純な心」により「暖かく抱いて頂」くことで生まれる「生きる喜び」や「大人の世界に見ることのできない綺麗な世界」に接することで親のなかに生まれる「浄化され

た心」（133 頁）など，大人と子どもの世界を対比する子ども観が語られる。また設立以来「子どもをよくするにはどうしても先ず母性を教育せねばならぬ」との目的で作られた「母の会」に参加した阿佐ヶ谷幼稚園の母親は「子供の心理や精神生活について，いろいろお話を伺って本当によかった」との感想を述べ，さらに，小学校入学後も教育の効果を十分にするために，母親教育の機関を作ってほしいとの要望を出している（170 頁）。その関心は子供の村保育園のような「凡ての子供の幸福」ではなく，我が子に注がれている。このように，協働組合型保育所と郊外型幼稚園とでは，都市再生という点での「相互連関」というよりも，家庭の状況や母親たちの意識，子ども観，親の会のあり様の違いが浮かび上がる。

さらに，子供の村保育園の掲げた「生活訓練」「協同自治」の概念と大正新教育運動との関連や児童の村小学校の教師，野村芳兵衛の「概念との同質性」（94 頁），「父様母様学校宣言書」での「両親の協力」の宣言と，野村の子育ての男女協力の思想の同質性も目を惹く。野村は，性別役割分担家族は資本主義に適合的な家族形態として登場したことを指摘し，夫も妻も共に農業労働に従事するという近世以来の民衆たちの夫婦関係と子育ての遺産を，近代に継承し生かそうとする視点から，子育てへの男女協力を説いたのであった［沢山 2013：119 ～ 122］。「両親の協力」の宣言と子育ての男女協力の思想との同質性を考えるとき，協働組合型保育所の保育は果たして，「オーエンの影響とフレーベル主義保育の修正」（244 頁）といった欧米の系譜だけで捉えられるのかという疑問が浮かびあがる。外在的な欧米の影響というだけでない内在的な歴史的系譜の究明が課題として残されている。

「相互連関」の内実という点をめぐっては，光の園保育組合と松沢幼稚園の両者を創立した賀川の子ども観も興味深い。著者は，賀川が長男誕生を機に抱いた，子どもを「大人が悲観的，否定的な自己のあり方を克服し，肯定的な自己の充実を取り戻すための象徴的な存在」として捉える子ども観を，「童心主義とは異なる子ども像」（186 頁）（傍点，評者）と性格づけている。しかし，新中間層の親たちから支持され童心主義子ども観の象徴とされる『赤い鳥』の創設者，鈴木三重吉の『赤い鳥』創刊の理由と，賀川の松沢幼稚園創設の動機は奇妙に重なりあう。

三重吉の『赤い鳥』創刊の動機は，創作上のゆきづまりから作家としての筆を折ったことと，長女を得た喜びにあった［沢山：115］。他方，賀川の松沢幼稚園創設の動機も，「孤独感と寂寥感を友好的な関係において解消してくれる唯一の存在」（183 頁）でもあった「スラムの子どもたちを感化，矯正する事業」への「挫折感」と長男の誕生を機に，その養育のためにスラムから郊外へ移住したことにあった。このように両者を重ね合わせてみるとき，童心主義は「無垢なる子どもを礼賛するロマン主義の影響を受けた子どもの観念」（185 頁）とは単純に言い切れない側面を持つ。賀川は，光の園保育組合では，スラムの子どもたちに一日三食の「栄養食」を「26 銭で配給」する（50 頁）など，現場の状況と深く関わる形で保育を行った。向き合った現実との関係で，賀川の創立した保育組合，幼稚園の保育は対称的である。しかし，両者の背後に通底するものとして，「賀川の都市再生の筋書きの一体性」（6 頁）のみならず，自己実現を阻む実生活との関係のなかでの，賀川の自己実現をめぐる模索があったことは見逃せない。

このように本書のなかには，1920 ～ 30 年代に生きた人々の子育てへの男女協力の思想の歴

史的系譜や，男たちの自己実現と童心主義子ども観との矛盾を孕んだ関係などを歴史的文脈のなかで再検討するための様々な手がかりを見出すことができる。その意味では，歴史のなかに生きた一人ひとりを，それぞれの生の原点である「経験」と，それぞれが生きた生の営みが見える「現場」を拠点に，「よい子」の自己認識まで深く掘り下げた大門の歴史研究なども参照し，1920 ～ 30 年代の歴史的な状況のなかに保育の現場を再度位置づけなおすとき，さらに豊かな領野が拓けてくるのではないだろうか。本書が，保育史にとどまらず，大人と子どもの関係史，子育て史へも示唆を与えるものとして広く読まれることを，そしてこの書評が，その一助となることを願っている。

（福元真由美著『都市に誕生した保育の系譜――アソシエーショニズムと郊外のユートピア』世織書房，2019 年 1 月，vii + 323 + 7 頁，定価 3,850 円（税込））

（さわやま・みかこ　岡山大学文明動態学研究所客員研究員）

【参考文献】

大門正克（2019）『増補版　民衆の教育経験――戦前・戦中の子どもたち』岩波現代文庫
沢山美果子（2013）『近代家族と子育て』吉川弘文館

【書評一覧】

浅野俊和（2020）『人間教育の探究――日本ペスタロッチ・フレーベル学会紀要』32
太田素子（2019）『幼児教育史研究』14
志村聡子（2020）『日本教育史研究』39
湯川嘉津美（2020）『教育学研究』87（1）